

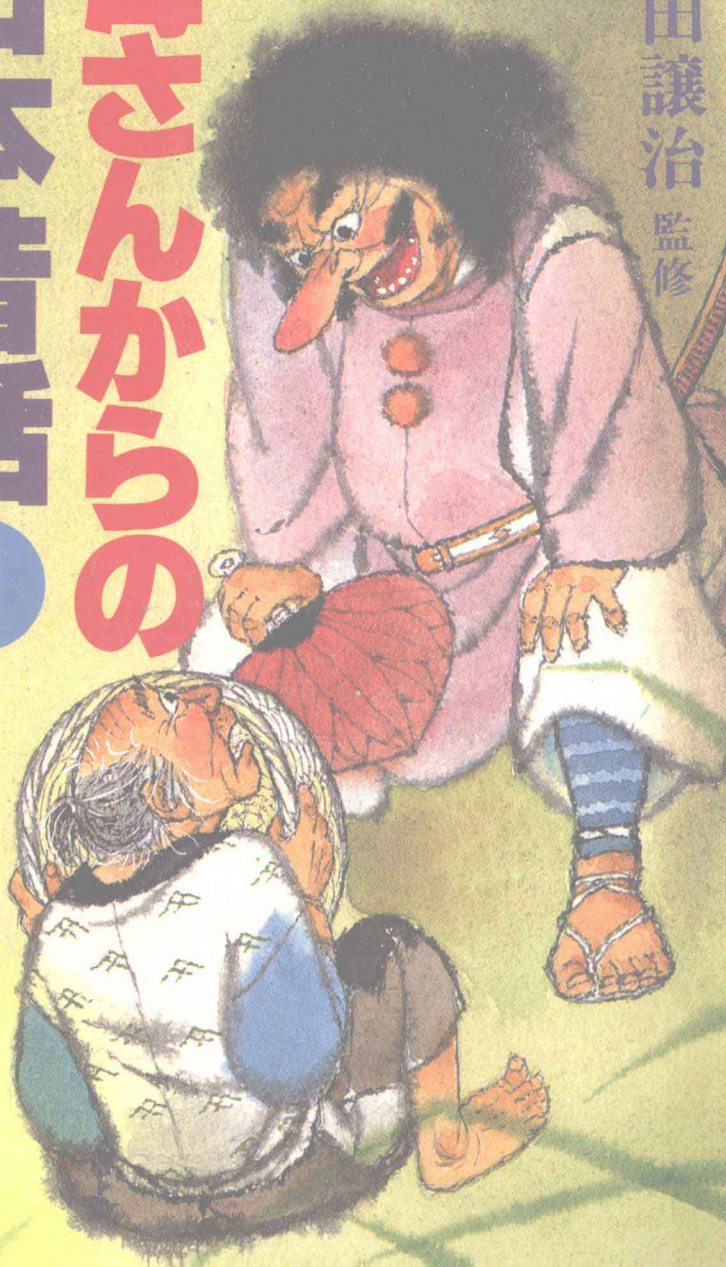
坪田讓治 監修

# 母さんからの

# 日本昔話 1

カラー版

本好きな子にする読み聞かせ



〔学研の家庭教育シリーズ〕

**母さんからの日本昔話①**

——本好きな子にする読み聞かせ——

---

定 価 980円  
監 修 坪田 譲治  
発行人 黒川 巖  
編集人 本郷左智夫  
発行所 株式会社 学習研究社  
〒 145 東京都大田区上池台4-40-5  
振替 東京8-142930  
印刷所 町田印刷株式会社

---

この本の内容製本に関するお問い合わせは、下記あて  
お願いします。

文書は、  
東京都大田区上池台4-40-5 〒145  
学研お客さま相談センター  
「母さんからの日本昔話①」係  
電話は、東京(03)720-1111(大代表)  
☆無断転載、無断複写複製(コピー)を禁ず  
©GAKKEN  
1980, Printed in Japan  
0037-166 755-1002

版 本好きな子にする読み聞かせ

さんからの

日本昔話  
①



## ま、えがき

坪田讓治

私が昔話というものを知ったのは、幼い私を寝かせるとき、母が聞かせてくれたからであります。弟の寝つくのを待ちながら、

「おかあさん、まだ、おかあさん、まだ。」

そういつて、私は母が私の方をむいてくれるのを待ちました。

やがて、弟を寝かせた母は、私に昔話を聞かせてくれましたが、その昔話のなんと楽しかったことでしょう。

母の知っている昔話は、もとより、ごくわずかでした。それでも、その昔話は、どれもこれも面白く、何度くり返して聞いても、あきることはありませんでした。

ところで、いまの子どもたちは、お母さんから昔話を聞かされているでしょうか。

おそらく、そんな子どもは、ほとんどいるまいと思われま

なぜなら、いまは生活のテンポがあわただしく、お母さん方は、子どもに昔話を聞かせるような状態にはないということが一つ、もう一つは、お母さん自身が、昔話というものを知らないで育って来たことに理由があるかと思われます。

この本は、そうしたお母さん方に、ぜひ日本の昔話を知ってもらいたいと思って編まれたものであります。

そのため、日本全国の、美しい、玉のようなお話が全部で二十九話も収められております。

昔話は、童話とは違います。

われわれの祖先の、ものの考え方、感じ方、喜びや願いが、一つ一つの話にこめられております。

それが、昔話の童話と違うところで、そして、昔話のなよりの魅力なのです。

お母さん方が、この本から日本の昔話の面白さを学んで、それを子どもたちに語り聞かせてくださるよう、願ってやみません。

# 母さんからの日本昔話① || もくじ

カラー版一日一話の読み聞かせ  
母と子の日本昔話 9

やまんばのみの 大石 真・文 10  
太田大八・絵

うまいものさがし すどうかつぞう・文 26  
田中秀幸・絵

犬の目じるし 花岡大学・文 40  
久米宏一・絵

すすきの矢 棕 鳩十・文 46  
清水耕蔵・絵

そできりぎつね 清水達也・文 54  
こさかしげる・絵

また出たおばけ 大川悦生・文 61  
原田維夫・絵



さる地ぞう

西郷竹彦・文  
太田大八・絵

68

小牛こうしになったおよめさん

今西祐行・文  
久米宏一・絵

79

右みぎの目だぬき

鶴見正夫・文  
田中横子・絵

94

てんぐのうちわ

たかしよいち・文  
高橋国利・絵

101

鳥とりのみじい

宮脇紀雄・文  
梶山俊夫・絵

108

おにのわらぐつ

岸 なみ・文  
若菜 珪・絵

116

つらら女房にようぼう

谷 真介・文  
三谷鞞彦・絵

123

たにしちようじゃ

木暮正夫・文  
北島新平・絵

131



一日五分の読み聞かせ

日本のわらい話 137

山は火事 138

ねこのにぎりめし 140

こたつの入り方 142

みょうが宿 144

死んだ女房 146

貸家札 148

声が高い 150

もとの平六 152

とろかし草 154

だんごむこ 156





二階に馬 158

小判がこわい 160

へえりんか ひらりんか 162

とびになった与八 164

きもだめし 166

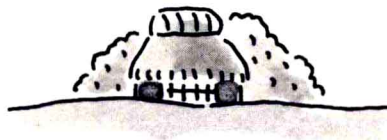
|| 読み聞かせのコツ ||

親も一緒に楽しむ気持ちでゆっくり読む

この本の利用のしかた

この本には、読書好きな子どもに育ててほしいという願いをこめて、お母さんが読み聞かせをするために最も適した昔話をよりすぐって収めてあります。

活字を大きくして読みやすくし、カラーの絵を豊富に入れて絵本のような味わいを出しています。くり返し、子どもに読んであげましょう。字を覚えた子どもは、一人読みもできます。母と子で一緒に楽しんでください。



表紙デザイン 内藤正人

表紙絵(表) 高橋国利

〃 (裏) 三谷鞆彦

目次カット 武市加代

編集協力 スタジオVIC

# 母と子の日本昔話

カラー版・一日一話の読み聞かせ

につ

ぼん

むかし

ばなし



# やまんばのみの

大石 真・文／太田大八・絵

むかし、あるところに美しいむすめがおった。

ある秋の日、仲間と山へきのことに出かけたとこが、いつのまにやら仲間とはぐれて、たったひとりになってしまった。

あつちをさがし、こつちをさがしても、いっこうに仲間は見あたらん。

そのうち日はくれるし、冷たい風はふきだしてくるしで、むすめはすっかり心細くなってしまった。

それで、なんとか山からおりようとしたが、ますます山のおく深くにまよいこんでしまった。

あたりが鼻をつままれてもわからんほどのまっ暗くらになると、遠く近くから、なにやらおそろしげなけものうなり声が聞こえる。

さあ、そこでむすめが青くなってぶるぶるふるえておると、そのとき、山のむこうに、ぽつんと一つ、あかりが見えた。

そこで、むすめが、むがむちゆうでかけていくと、古ぼけた小さな家が一けんたっておったので、むすめが、ほつとして、とんとんと戸をたたくと、「どなたじやな。」

家の中から、しわがれた女の声が聞こえてきた。そこで、むすめが戸をあけてみると、白いかみを長くたらししたばあさんが、たったひとり、いろりにあたっておった。

「道にまよってなんぎをしております。なにとぞ一晩とめてくださいまし。」  
むすめがたのむと、ばあさんはするどい目で、じつとむすめを見つめてお

つたが、

「それは、できぬ。とめることはならぬ。」

と、いうた。

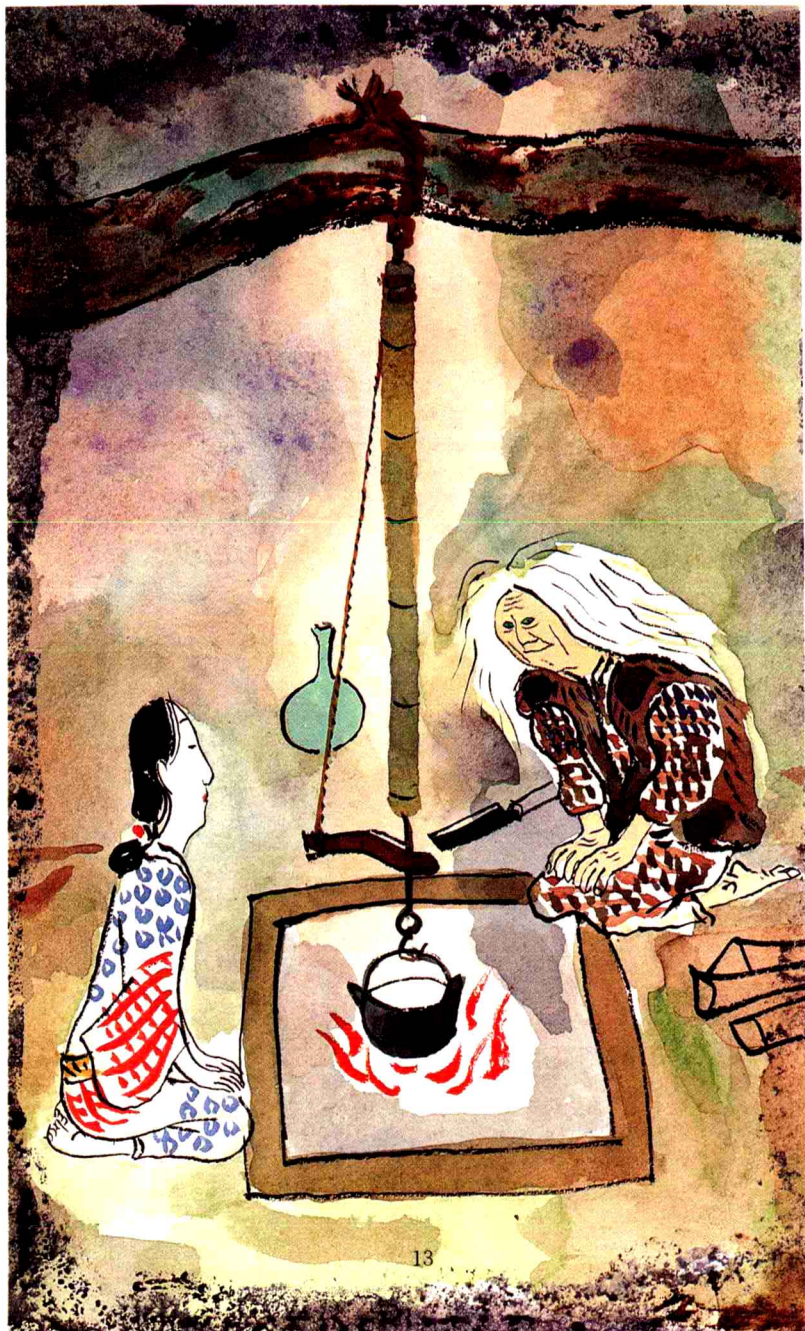
「それは、また、なぜでございますか。」

おどろいてむすめが聞きかえすと、

「わしは、この山やまにすむやま・まんばだでのう。おまえをとめると、おまえを食くいとうなる。それではおまえがかわいそうじゃで、おまえをとめるわけにはいかんのじゃ。」

と、ばあさんはいうた。

そういわれてむすめはとほうにくれたが、このまま夜道よみちを歩あるいていっても、どうせくまかおおかみに食くわれてしまうにきまつておる。同じ食くわれるなら、やまんばのほうがどんなによいかも知しれんと思おもったから、



「いいえ、食たべられてもかまいません。どうかとめてくださいまし。」  
と、必死ひらにたのみこんだ。

すると、やまんばは、

「それなら、ここに来てあたれ。」

と、いろりをあごでさし、いろりの前まえにおずおずと手をさしだしたむすめに  
むかって、山やまのことだの里さとのことだの、いろいろ話はなしておったが、そのうち  
だんだんやまんばの目めの光ひかりがやわらいできて、

「やっぱり、とめるわけにはいかぬ。とめると、どうしてもおまえを食くいと  
うなるから。」

「では、この夜よふけに、ひとりで山やまを歩あるいていけ、というのですか。」

むすめが青あおざめた顔かおをしていうと、やまんばはやさしくわらって、

「いや、心配しんぱいすることはない。そのかわり、おまえにいいものをあげるから。」



というと、家のおくからきれいなみのをもってきて、

「このみのにむかつて、三べんまじないをいえば、思うように姿がかえられるのじゃ。」

そういうて、むすめにまじないの文句を教えてくれた。

むすめはやまんばに礼をいって外に出たが、さて、なんの姿になったらよいか、わからん。

「そうだ、やまんばの姿になつてみよう。」

そこで、みのにむかつて三べんまじないのことばをとなえてみたが、なにしろ、まっ暗くらなもんで、自分がやまんばの姿になったかどうか、さっぱりわからん。

それでも、とにかく、山道をどんどん歩いていくと、

「おい、おい、まてえ。」